第５学年（体育科保健領域）保健学習　「どうすれば人を助けようと思う勇気がわいてくるか」

授業者：お茶の水女子大学附属小学校
養護教諭　　江部　紀美子

命が大切であること，目の前で人が倒れていたら助けるもの，こういった当たり前に思えることについて保健学習で取り扱う際，「やっぱり大切だね。」と確認するだけでは，子どもたちにとって意味のある活動になるとは言い難い。実際に自分の目の前で人が倒れていたらどうするのか，自分に何ができるか，どんな人でも助けるべきなのか，具体的な場面や抽象的な問いについて話していくことで，「自分には何ができるのか。」，「自分は何かするべきなのか。」と自身の中に真正の問いが生まれてくる。この生成された問いについて，自分（たち）で考えていくプロセスがこれからの保健学習には必要ではないだろうか。そこで，保健学習にてつがくをかけ合わせることで，知って終わりにしない自分事になる保健学習のあり方を検討した。

１　単元について

本校では、毎年 10 月に５年生を対象に防災訓練が行われ、消防職員から胸骨圧迫やＡＥＤの使い方について学んでいる。知識や技術を中心に習得する単発の講習では，何となく自分でも助けられるかもしれないという一次的な自己有能感が高まるだけにとどまり，実際に命を救う場面を想定し，自分事としての実感を持たせることは難しいのではないかと考えている。そこで 2017 年度からは防災訓練後、さらに心肺蘇生法を学んだ後に，問いをもとに、てつがく対話を行っている。てつがく対話を取り入れることにより、命を大事にする心や人を思いやる心を育み、また社会に生きる一市民として自分事としてとらえ、将来にわたって問い続ける子どもになってほしいと願っている。

本実践を行う前に、人の命を救うためには何が必要（大切）だと思うか、目の前で人が倒れていたらどのような気持ちになるかについてアンケートを行った。テキストマイニング※1による分析（スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示される）を行ったところ、ＡＥＤや心臓マッサージ（胸骨圧迫）など、心肺蘇生に関わる手技そのものについて回答した子どもが多かった（図１）。また、目の前で人が倒れていたら、どのような気持ちになるかについては図２の通りである。積極的に行動しようと思っても、やり方を間違えたり、正しくできなかったりするかもしれない不安な気持ちも伺えた。これは、子どもに限らず、大人でも抱く当然の感情である。それでも、倒れた人が誰かにとって、かけがえのない大切な人だと気付き、小学生の自分にもできることを考えるために授業を計画した。

図１　人の命を救うために必要なモノ・こと

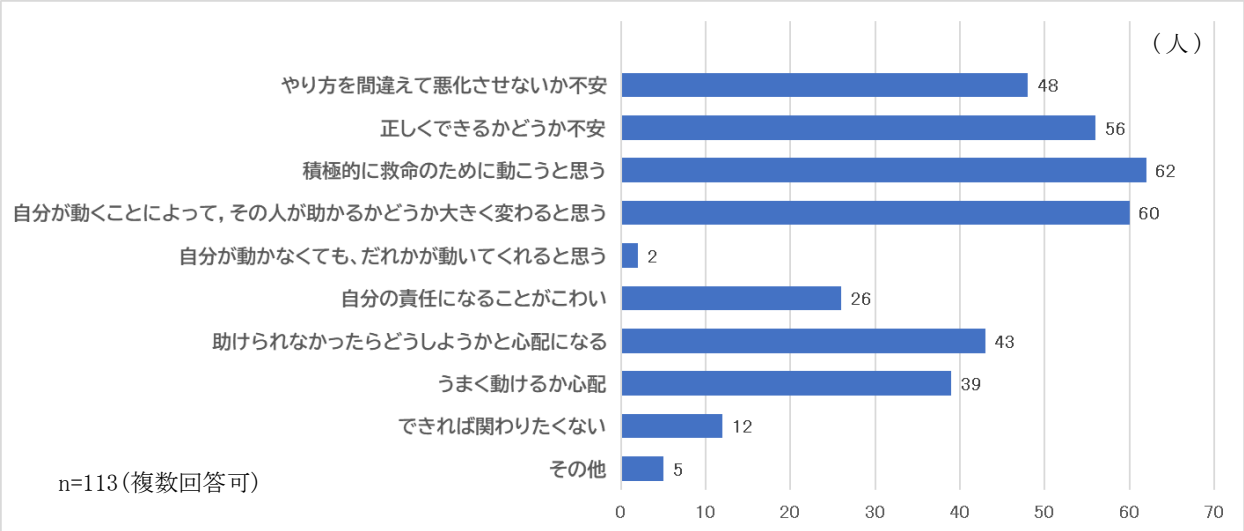

図２　授業前のアンケート「目の前で人が倒れていたら、どのような気持ちになるか」

２　学習指導計画（全４時間）

第１次（１時間）　・防災訓練で学んだことをふり返りながら，心肺蘇生の手技についての知識を確認する。
・「見て見ぬふりをするのはなぜ？」傍観者効果※２について説明する。

※２　傍観者効果：多くの他者の存在により、一人だと行われる行動が抑制される現象のこと。
３つの要因が抑制の状況を作る。①責任分散　②多元的無知（集合的無知）③評価懸念

第２次（２時間）心肺蘇生法実習

：１時間目　主に胸骨圧迫の方法　４人に１つ用いて

水の流れを利用した胸骨圧迫学習キット（商品名：ドックン。適切な胸骨圧迫をした場合、２リットルの水を１分間でリレーする仕組み）を用いて心臓の働き（血液循環）と胸骨圧迫の方法を体験する。

＊５年生の平均体重（36.2kg）の 13 分の１（血液量）と同じ量（2.8kg）のバケツの水を１分 30 秒で空のバケツに移動させる。

：２時間目　主にＡＥＤの使い方　４人に１つのＡＥＤトレーナーと蘇生人形を用いて

第３次（１時間）：問いをもとに「てつがく」しよう

３　授業の実際とふり返り

２時間の心肺蘇生の実習後にも、人の命を救うためには、何が必要（大切）だと思うか、同じアンケートを行ったところ、図３のように勇気や人を助ける気持ち、周囲の人と協力すること等の回答が増え，勇気と答えた子どもが半数近くだった。また、第３次で考えたい問いについてもアンケートを行った。例年の傾向として、「命とは何か」のような抽象的な問いを考える子どもも多いが、今回は一人ひとりが実際の救助場面をイメージするような問いを立てた子どもが多かった。その中で、「どうすれば人を助けようと思う気持ちがわいてくるか」と考えた子どもがいた。図３にあるように、勇気が一番多く挙がったため、気持ちの部分を勇気に変えて、対話を行うことにした。

図３　人の命を救うために必要なモノ・こと

「どうすれば人を助けようと思う勇気がわいてくるか」という問いで、てつがく対話を行い、互いの考えや意見を聴きあった。以下は、あるクラスの対話の様子（抜粋）である。

Ａ児：勇気って全部同じだと思う。やらなきゃいけないなって思いがあると、湧く。
Ｔ：みんなは勇気を振り絞った経験はありますか？清水の舞台から飛び降りる気持ちで。勇気ってどこから湧いてくるのかね？
Ｂ児：恐怖や不安とかはいろんなものから出てくる。生きるかどうか不安でも、でもやらないと。
Ｔ：どうやったら勇気のバロメーターが上がるのだろう。
Ｂ児：私はできないと思うとできる。
Ｃ児：人を助ける勇気は、最後よくなってくることを考えると出てきそう。
Ｄ児：人が倒れてても、助けたら助かるかもとか、発表会とかやってみたら成功するかもと思えば勇気が出るかも。
Ｅ児：助けないより、助けた方が喜びがある。それを勇気にしたら。
Ｆ児：勇気が湧かないように思ってるだけで、元々人間は勇気があって、ただそれを妨げてるものがあるから，ないように感じるだけなんじゃないかな。
Ｂ児：そもそも人助けって勇気が必要かなって思って。そもそも倒れている人は、助けることは義務っていうか。
Ｇ児：助けるのに勇気っていうよりかは、パニックになっちゃう。勇気よりは冷静になる方が大事なんじゃないかな。

ふり返りでは、「会ったこともないような人を助けようと行動することはやっぱり難しい。それでも行動しないとなんにもならない。行動をする勇気を持てるように日頃からチャレンジ精神を大事にしたい。」「私が動くことにより、助かる人が１人でも増えると思った。普段から勇気を出したり、困っている人がいたら手伝ったりして、もしものことがあっても大丈夫なようにしたい。」「命に関わること以外にも困った人がいたら助けてあげたいと思う。」のように、日頃から他者とどのようにかかわっていくかについて記述する子どもが多かった。このように、救命処置という遠い事象のことを問うことを通して、身近にいる周囲の人への思いやりや関わりについて考えられたことに意味があるのではないだろうか。そこから再び，目の前で人が倒れていたらどうするか問い，考え続けていける子どもになるように，教師自身も「てつがく」し，働きかけていきたい。

※１　ユーザーローカルＡＩテキストマイニング　https://textmining.userlocal.jp/